深く潜んで冬を越し、翌春に至つて翅を生じ初夏の頃成蟲となるのである。

彼は其の前肢の形から土中に棲息する模様がモグラに酷似してゐる。常に土壌の中へ隧道を掘つて歩き、植物の根を食ふのであるから、苗木、農作物等の根にしてケラの害を被るものが少くない。

幼蟲時代が三ケ年

甲蟲類中にはコメツキと云ふ害蟲が居る。之れも極ありふれた昆蟲で、夏の夜などよく燈火を尋ねて來る事がある。捕へて仰臥させると、コツリと音をさせて跳ね返る。長さ六分内外、黑色にして長みのある堅い體をもつてゐる。

コメツキは體の長く幅の狹いのに拘はらず、肢が短いので、一度仰向きに轉がせば容易に舊の位置に復る事が出來ない。そこで、仰向となつた時には、頭と前胸部とを上方に曲げて床を離し、然る後急に身を反して頭を以て床を一擊

する。其の拍子に體の後半が跳ね上つて床の上に落ちる。すると元の位置に復して歩く事が出來るのである。吾々は一長一短よく適應して、聊かも狂ひなくムダのない自然の現象を、コメツキのやうな小さな動物の體にも見出す事が出來るのである。

扨てもコメツキが地中に産卵すれば、やがて卵からはハリガネムシと稱する幼蟲が出る。ハリガネムシは圓柱形の蟲で。常に植物殊に大豆や小豆の根などを食害するので、農家の敵と見做されてゐる。此の幼蟲時代は三年であるが、斯く幼蟲時代の長いものは稀れである。

其他、甲蟲の中には、大根、蕪菁の葉を食害するルリサルハムシ、瓜類の葉を食害する、ウリバヘ、甘藍、アカザ等の葉を害するカメノコムシ、果樹の葉を害するリンゴハムシ、柳の葉を害するルリハムシ、豆を害する豆蟲、茄子や馬鈴薯や南瓜や西瓜などの葉を害するテントウムシダマシなどがある。それ

それ異れる習性、生活狀態をもつてゐるが、茲に取り立てゝ云ふ程の事もない。然し、實物に就て仔細に觀察したならば、必らずや何等か興味ある現象を發見する事が出來るであらう。

稻と大根を害する蠅

蠅の中にて、動植物に寄生する種類に就ては、既に前章に於て述べた。茲に農作に害を及ぼす種類がある。それは、常に水邊の花に群集してゐる水蠅と稱するもので、體長五六分、色黑く、廣幅い腹部に三對の黃紋がある。

此の水蠅は、水邊の水草に卵を產みつける。孵化した幼蟲は水中に入り、微細な動植物質を食す。其の形棍棒の如く、小さい方が後部で、其の先端に肛門と呼吸口とを一緒に開き、其の周圍には毛を生じてゐる。口は太い方の端に開き、二個の鈎をもつてゐる。常に體を屈曲して水田中を運動し、稻の根を浮上

らせるので、農家の恐るゝ處である。十分成長すれば蛹となり、幼蟲時代の皮膚に乘り、水面に浮んで流されるうち、蛹の皮を破つて遂に成蟲となるのである。

又、大根の蛆と云ふ蟲も一種の蠅の幼蟲である。大根を拔く時、よく其の表面に縱橫の溝の入つてゐる事がある。之れ卽ち大根の蛆が食害した部分である

此の大根の蛆は三分許りの乳白色の蛆で、十分大根を食へば皮膚が硬くなり赤褐色の俵のやうな形となり、其の內に蛹となる。蛹からは淡灰色の蠅が出る。大根蠅と云ふのは之れである。其の雌蟲は大根の根に二百粒許りの卵を產みつける。それが十日を經て孵化し、蛆となつて土中に潛り込み、前述の如く大根の表面を食荒すのである。

第十章　愉快なる昆蟲

美しく然し脆い螢の生涯

専ら眼に見、耳に聞えて美しく快いものと云ふ標準で、其の著しいものを擧げて、之れが生活狀態を觀察して見ようと思ふ。無論、之れは科學的の分類ではないが、吾々は害蟲や毒蟲に就ての知識を必要とすると同時に、美麗な蟲、感じの佳い蟲に就ての知識を缺いてはならぬ。斯う云ふ考へから、各種類の昆蟲の中から前述の標準によつて拔き出して見た。

夏の夜の景物として、水邊の木蔭や草間に青綠色の光を放つ螢ほど涼しい心持のするものは少い、されば、古來、和歌にも詠まれ、繪にも描かれ、風流の道に遊ぶ人の讃美、興趣の的となつた。今、吾々は此の詩的幻影を剝き去つ

た螢、昆蟲類甲蟲目の一動物としての螢に就て觀察せねばならぬ。

螢の中で、最も普通の種類は源氏螢又は大螢と云ふものと、平家螢又は姫螢と云ふものとである。前者は其の名の如く大きく、長さ五六分、翅の色が黑褐色である。後のは概して小さく、三分位で色は黑い。何れも胸は赤く、前胸の下に後頭を隱す。尾端の二節は夜分光を放つ處で、晝見れば暗黃色又は桃色である。

尻の光る理由

誰しも知る如く、螢の盛んに出るのは五六月の候である。その壽命至つて短かく。交尾して產卵を終れば、ズン〳〵死んで了ふのである。蛹から出て三四週の壽命と思へば間違ひはない。

扨て、其の尾部はどんな裝置があつて、斯くもよく光るであらう。其の發光

部分を細かに觀察するに、多數の細胞から成つてゐるが、細胞中に黃色の微細い粒が充滿してゐる。其の黃色の粒が卽ち發光性の物質で、之れが空氣に觸れると光を發するのだ。卽ち、螢が氣門から空氣を吸ひ入れて、此の部に其の空氣を送る毎にピカリ〳〵と光るのである。之れを化學的に見れば、發光物質が氣門から入つた空氣に觸れ、其の中の酸素と化合する結果發光すると云ふ事になる。

而して其の發光部は雌よりも雄の方がよく發達してゐるので、從つて光の度も高い。雄は又飛翔する事も雌より優れてゐる。雌雄ともに翅を有し、空中を飛ぶけれども雌は多く木の枝などに止まつてじつとしてゐる。

次ぎに、螢の光は何の用をなすかと云ふ事が問題となる。之れは雌雄が其の所在を明かにして受胎の目的を遂げんとするのが其の一、それから光の爲めに敵蟲が寄りつかぬ、其處で、自身保護と云ふ事にもなる之れが一。尙ほ一つは

前章に於て述べた處の保護色の一種、保護的警戒の役目をもつとめる。卽ち螢は惡臭と不味とを有する昆蟲であるから、之れを捕食するものがない。けれども暗夜其の所在を示しておかねば、誤つて食はれないとも限らぬ。そこで、危險！近寄るべからずと云ふ代りにピカリ〳〵と光つてゐると云ふやうにも考へられる。

卵も蛆も皆光る

雌蟲が水邊の草木などに止まつてゐて、比較的薄く光つてゐるのを雄が見出すと、其處へ接近し、遂に受胎させる。受胎した雌は水邊の草の根に卵を產みつける。此の卵は極々小さい粒で、其中には發光物質を含んでゐるので絕えずピカ〳〵と光る。それから一ケ月の後には黑色の蛆が孵化る。此の幼蟲も尾端に發光部を有し、盛んに光る、晝間は草蔭にかくれてゐるが、夜はズン〳〵草

の上や木の葉などを搜して蝸牛、ナメクヂ、蚯蚓等を捕食する、此の幼蟲は翌年四五月の頃、地下の四五寸の處に潛り込んで其處へ室を造り、此の内で蛹となる。蛹は二週間ばかりで成蟲が飛び出すのだ。

螢によく似た形をしてゐるが、發光器のないものがゐる。之れはオバボタルと云つて、晝は花の蜜を吸つて生活してゐる。

葱の白根に眼のないキリ〳〵ス

夏から秋にかけて、叢間、榛莽などに在りて美音を發するキリ〳〵スの類も亦、甚だ快き昆蟲の一つである。

普通キリ〳〵スと云ふのは體長一寸二三分、綠色或は黃褐色で、觸角は細長くして髮毛の如く、夏の日盛りにチョンギース〳〵と鳴くものである事は、今更ら云ふ必要もなからう。

あの一種あはれに、面白い美音は何所から發するのであらう。先づ、一頭のキリギリスを捕へて其の前翅を檢すれば、其の附根の處に小さい鏡のやうなものがある。之れは發音鏡と云ふもので、鳴くときは之れを左方の前翅で摩擦するのだ。

次ぎに起る疑問は、何の爲めに鳴くのであるかと云ふ事である。之れは前に述べた螢の光の効用に似て、雌雄の兩性が相接近する手段である。殊に、キリギリスは雄蟲ばかりが鳴く、雌蟲は決して鳴かない。要するに、雄蟲が美音を發して雌蟲を呼び寄せ、交尾受胎の目的を遂げる事になるのだ。唯だ面白可笑しく一時の興に乘じて鳴くのではない。

從つて今、キリ〳〵スを捕へて其の美音を樂しまうと思つたならば、雄蟲を選ばねばならぬ。然らば、其の雌雄の區別は如何にして見分けるかと云ふに、雌には尾端に長さ七八分の劒の形をした產卵管がついてゐる。而して腹部は雌

の方が比較的太い。此の二點に依つて容易に區別はつくのだ。

食物は主として草の柔かい部分、殊に葱の白根や南瓜、胡瓜の花や其の果實の柔かな部分等を好んで食ふ。故に、キリ〳〵スを捕へやうと思つたならば、棒の先に葱の白根を結びつけ、其鳴きしきつてゐる叢の中へ、そつと差し入れるのである。すると、キリ〳〵スは早速其白根に飛びついて之を貪食する。それを見濟して、靜かに手元へ引寄せて攫めば譯なく捕へる事が出來るのだ。

交尾した雌蟲は草間の土の中へ其の長い產卵管を突き込んで數十個の卵を產み落し、最後に粘液を出して、之れを包んでおく。その粘液はやがて乾いて固くなり、堅固に卵を保護して冬を越させる。翌年初夏に其の卵は孵化ると云ふ順序である。

喧騷な轡蟲、凉しげな松蟲

キリ〳〵スと共に其の音を賞翫されるものに、馬追蟲、轡蟲、コホロギ、松蟲、鈴蟲などがある。

馬追蟲は長さ一寸位の美しい綠色の體で、脊に一條の黃褐色の縱縞を帶び觸角は髯の如く細長く、後の方に靡かせてゐる。

夏から秋に至る間、よく燈火を慕つて寄つて來る。障子や緣端などに止まつて、前翅を少し開き氣味にして、例の發音鏡を摩擦する。スイッチョ〳〵と鳴くやうである。だから或る地方では此の馬追蟲の事をスイッチョと云つてゐる而して馬追蟲と云ふ名は、其の鳴音が、シーッチョと馬を追ふ懸聲に似てゐる處から起つたのであらう。

轡蟲は如何にも喧騷しげに鳴く。恰も群馬の轡がガチャ〳〵と鳴るやうである。從つて其の發音鏡も大きく、心臟形をしてゐる。而して其の鏡面は少し凹んでゐて、無數の微細な凹凸紋がある。之れを覆うてゐる左側の翅を以て激し

く摩擦する時、例のガチャガチャと云ふ音を發する。餘り愉快な音でもないやうだが、古來我國には之れを賞翫する者が多い。

松蟲はチンチロリン〳〵と高調子に清い涼しい音を發するので賞翫される。夏の夜、雜木林などで鳴き頻るのを聞くのは、實に快いものだ。

體の長さ六分位、色は褐色である。雄の方は觸角が非常に長く、體長の三倍以上あるのが普通である。其の清澄な美音は翅に依つて發するのである。卽ち松蟲の雄の前翅には數個の黑紋が凹凸をなしてついてゐる。依つて左右の前翅を迅速に擦りあはせると發音する。雌蟲の發音し得ないのは、つまり此の黑紋の凹凸がないからだ。

鈴蟲はリン〳〵と銀鈴を振るやうな音を出す。體長五分位、前翅廣く其の末端が圓く、其の面には波紋狀の凹凸紋がある。左右之れを摩擦する事によつて彼の清らかな、哀れに淋しい音を發するのである。

秋の哀れを誘ふコホロギ

コホロギは秋の蟲である。草原、人家の附近等到る處に棲んでゐる。淋しい音に鳴くもので、秋夜人の腸を絞らしめる。體長は六七分、黑褐色にして光澤がある。今、鳴く方の蟲卽ち雄を捕へてその前翅を見るに、其面には複雜なる凹凸紋があり、其の內面の基部には殊に明瞭なる一弧線がある。顯微鏡に照らせば其の弧線は數多の齒の併立したものである事が分る。而して此の弧線は左右にあるが、コホロギは鳴く時左右の前翅を高く上げて、迅速に摩擦する、其の時、翅の凹凸紋は琴の糸の如く、弧線をなした齒は爪の如き作用をして、斯くも哀れな音を發するのである。又コホロギには耳がある。前肢の脛節に在る楕圓形の小さい白紋は卽ちそれである。

此の外、エンマコホロギは野外田圃に多く、オヤマコホロギは人家の緣下、

竈の附近などに棲み、何れも秋夜淋しく哀れな音を出して鳴く。

蝶は自然界の裝飾品

愉快なる昆蟲の一として、蝶を擧げる事を忘れてはならぬ。蝶は一般に其の翅の色彩美麗にして、春から夏、秋に亘つて、咲き匂ふ花と共に自然界を裝飾するものである。

吾々は蝶、蛾の類を捕へた時、いつでも經驗するのは、手に夥しく粉狀のものがつく事である。之れは翅を被へる細鱗であつて、翅の美しいのは、此の鱗の色彩によるのである。故に翅から鱗を悉く取り去れば、無色透明になつて了ふ。斯く翅に鱗を有するのは、蝶、蛾等の類の一特徴で、鱗翅類と云ふ名も其所から起つたものである。

蝶、蛾は變態は完全で一生中四期の體形をとる。卵から幼蟲となり、次いで

蛹となり、遂に成蟲卽ち蝶、蛾となる事は、既に述べたところであるが、此四期は多く一年の中に一循りするけれども、中には一年内に二回又は三回も新たなる生涯を經るものがある。二回のものを二化生、三回のものを三化生と云ふ。

美人の眼を牽く爲の美裝

卵の形は多く球形で、色は白、黄、褐、紅、青など多樣である。又た中には縞模樣のものもある。孵化れば圓柱形の幼蟲が出る。其の體は十三節から成り、俗に毛蟲とか、イモムシとか、アヲムシとか云ふのは凡て此の類の幼蟲なのである。幼蟲の頭は硬くして葉を嚙むに適する口と數個の單眼と一對の微小なる觸角とをもつてゐる。體に長い毛や棘を密生してゐるものは俗に毛蟲と云ふもので、毛がないもの又は短かい軟かな毛を疎らに有するものはイモムシ、アヲムシと云ふ。頭の次にある三節に一對づつの肢をもつてゐる。之れを胸肢

と云ひ、食物をとる際に之れを用ふる。そして第六節から第九節までの四節と最後の一節にも一對づゝの肢を具へてゐる。之れは歩行用のもので、物に附着するに適する。

幼蟲は體が軟かく、肢も敏捷でないから、動もすれば鳥類はじめ種々の動物に襲はれる、そこで之れを防ぐ手段として色々の巧妙なる用意警戒をしてゐる。或は保護色、擬態に依り或は惡臭、不味、毒素等に依り、避難をするのである。之れは既に詳しく『保護色と擬態』の章に於て述べた筈である。

幼蟲が十分成長すれば體を縮めて蛹となる。其の形、紡錘形で、褐色、黑褐色、黃色、綠色等の角質の皮膚に被はれる。蛹となる前に或は植物の枝や葉に附着し、或は地中に入る。而して蛾の多くは蛹化する前に繭を作つてその中に籠る。

成蟲は花の蜜汁を以て食物とし、左程に貪食でないのは、幼蟲時代十分營養

物を攝取し、それが脂肪となつて體內へ貯へられてゐるからである。口部は長く細い管となつて液汁を吸ふに適する構造となつてゐる。

鱗翅類は大部分蝶、蛾の類である。蝶は概して日中、空を飛翔し、翅は大にして體は小さく、靜止した時には、翅を合せて脊の上に立てる習慣がある。蛾は夕暮から夜にかけて花を尋ねまはる。體は割合に大きく、翅は靜止した時脊の上に屋根形に疊むのが常である。

兩者共に色彩は美麗だ。其美麗なるは、主として雌雄兩性が接近して、交尾を遂げるに便ならしめる爲めである。殊に雄の方の一層美しいのが普通であるが、之れは雌よりも其の數が多いところから、裝ひを凝らして美人の眼を牽く心要があつての事である。

鳥糞のやうな鳳蝶の幼蟲

アゲハ(鳳蝶)は大形の蝶で、翅を張れば三四寸もある。後翅は左右各一個の尾のやうな形の長い突起をもつてゐる。地色は黄に少しく綠色を加味し、太き黑色の網紋がある。容姿の堂々たる大蝶で。夏の日花から花へと活潑に飛び移る。

然し、其の美容麗態にも似ず、幼蟲の時代には至つて振はぬ姿をしてゐる。卽ち、卵から出がけには黑色であるが、段々皮を蛻ぐと白色の部分が現はれて一寸見ると鳥糞とまぎる。之れはつまり他の動物の眼を免れる爲めで止むを得ぬ次第。然し、更らに皮を蛻げば赤黃色の紋のある美しい幼蟲となる。けれども物に驚いた時、又は激昂した時には頭部から二本の角をあらはす。之れが一種の臭氣を出す。之れも保護的の裝置ではあらうが、決して愉快なものではない。

十分成長すれば體が次第に縮少し、最後に皮を蛻いで蛹となる。蛹は長さ八九分位、絹絲を以て尾端を樹枝に附着し、更らに胸部を週る一條の糸を吐いて、

其の絲の端を樹の枝につけて、丁度縊首のやうな風になる。俗にオキクムシと云ふもので、枳殼の藪などに垂れてゐるのをよく見かける。蛹は二週間ばかりで皮が破れて成蟲が出る。年二回發生し、第二回目は蛹の形で冬を越す。

アゲハの種類にキアゲハ(黃鳳蝶)、クロアゲハ(黑鳳蝶)、ヲナガアゲハ(尾長鳳蝶)、ヤマジョウラフ(山上蔦)、クロタイマイ(黑瑇瑁)、などがある。中に就て、山上蔦は麝香のやうな香を放つので麝香鳳蝶の名がある。此の香もつまり雌雄相索めんとする手段に外ならぬ。黑瑇瑁は全體眞黑の地に左右の翅には前後を通じて一條づゝの太い綠の帶がある。一名青筋鳳蝶と云ふ。

浴衣姿の紋白蝶

紋白蝶は、春の日菜の花、タンポポの花などの滿開する頃出る蝶で、遠く望めば白紙の小片を飛ばした樣に、空中を樂しく飛翔してゐる。春早々出でゝ年

に二三回發生するから、秋の末にも見られる。體の長さ五六分、翅を開いた時には二寸許りの小蝶で、翅は白く前翅の前角の處が淡黑色に染まり、且つ前翅の中央に二個の黑紋、後翅の前緣に近く一個の黑紋とがある。紋白蝶の名も其の斑紋、色彩から起つたのである。見たところ美しくはないが、柄の氣の利いた浴衣がけ姿のやうで涼しい氣持がする。

此の蝶の幼蟲は、大根、蕪、甘藍などの菜の葉を食ふアヲムシで、全體柔かな短毛を生じ、細かく長い蟲である。成蟲の飛翔するのは快い感じを與へるが其幼蟲は農家の害蟲である。雌蝶は菜園を飛びまはつて、葉裏へ產卵する。卵は二週間位で孵化し、盛んに菜の葉を食つて蛹となり、菜の莖や葉につく。數回發生する中で、秋の末に出た幼蟲は成熟後霜や雪のかゝらぬ處を求めて蛹化し、無事に冬を越えるのである。

筋黑蝶、紋黃蝶、黃蝶、天狗蝶、など何れも似よつた小蝶である。中に就い

て、紋黃の幼蟲はウマゴヤシ、カラスノエンドウなどの野生荳科植物を食つて生活する綠色の蟲である。黃蝶の幼蟲はネムノキ、クサネム、メドハギ等を食つて生活する。天狗蝶は頭部に長く突出したものがついてゐて、丁度天狗の鼻のやうである。之れは下脣鬚と稱する口部の一器官が變形して長吻狀に突出したのである。

オホゴマダラと云ふ蝶は琉球や臺灣から熱帶地方に普通のものであるが、體の長さ一寸三四分、翅を張つた時には雄は三寸五六分、雌は四寸二三分あり、日本產の蝶類中では此の右に出づるものはない。色白く翅の基根は黃色を帶び翅脈は黑く或は黑色の斑紋をもつてゐる。

——（昆蟲生活了）——

大正三年七月十三日印刷
大正三年七月十六日發行

定價金參拾五錢

著作者　須藤莊一
發行者　東京市神田區駿河臺袋町十六番地　河野正義
印刷者　東京市麴町區有樂町二丁目一番地　中村政雄
印刷所　東京市麴町區有樂町二丁目一番地　報文社

不許複製

發行所　東京市神田區駿河臺袋町（電話本局三三〇〇二番三三七〇〇四番七番）
東京國民書院
振替東京三〇〇九番

▼學生文庫——第一編

司法大臣　尾崎行雄先生述

學生諸君

尾崎先生は政治家たる以外、更に青年教育者たるの一面を併せ有す。憲政の爲め挺身健闘を辭せざると共に、青年の啓發指導に多大の力を盡さる。先生は常に進歩の味方にして、青年の同情者也。近時一世の風潮頗る險惡、朝野顯要の地に在る者皆操守を失ひ、後進の子弟やゝもすれば其の進む可き途に迷ふ。是れ天下の最も憂ふ可き事なりとし、是に本書を公にせらる。題して學生諸君！と云ふ、此の一語に先生が青年を愛せらるゝの奈何に深きかを見る可く、此の熱情は、青年前途の爲めに諄々の教を與へられたる也。青年の本領は奈何、青年はいかなる途に進むべき乎、生活と教育とは奈何に調和せしむべき乎、凡そこれ等青年諸君の知らざる可からざる大問題は、本書によりて始めて知ることを得べき也、百卷の書を讀破するも、青年の本領を知らずんば、何をかせん。青年らしき眞の青年たらんとせば、先づ此書を讀め、物質的にも、精神的にも、社會の勝利者優勝者たらんとせば、此書によりて尾崎先生の教に聽かざる可からず。

新刊　全一冊美本
發賣　定價參拾五錢
郵送料六錢

▼學生文庫——第三編▲

理學博士　山内繁雄先生著

遺傳の話

本書の内容は、いかに多趣味にして且つ實益に富むかは

下記の目次に徵せ

一、緒言
二、親と子とは似る——遺傳
三、親と子並に兄弟姉妹は全く同じではない——變異
四、遺傳の解釋——古來の學說
五、變異の解釋、變異の性質と起因——古來の學說研究の基礎となる事實
六、遺傳統計上の事實
イ、よき方——偉人の起因
秀でたる才能の遺傳
立派なる家族の系統
あしき方——惡性質の遺傳
ロ、生殖、生物學上の事實
生殖期の始と終
七、努力奮闘の成績——一代間に得たる性質
八、園藝植物家畜動物品種改良の實際方法——「メンデリズム」と雜種、純種、淘汰
九、健全優良の國民をつくる一方案——人種改良學
忌むべき病の遺傳
低能の遺傳
心身の退化
十、結論、青年の覺悟——遺傳と責任

新刊　全一冊美本
發賣　定價參拾五錢
郵送料六錢

學生文庫續刊豫告

■文字の話

■青年の修養

■ABCより

■儀式文範

■初等英語噺

■英文葉書の書方

學生文庫は、豫め冊數を定めず、成るに從つて編を重ぬるものとす。唯だ極めて內容の充實を期し、中學百科に亘りて趣味ある解說をなす。本文庫を備ふる人は、一切の智識を供給せらるゝ圖書館を有するに同じ。「室內圖書館」として學生文庫は、青年學生諸君の座右に缺く可からざるものたり。且つ各卷皆同一の體裁となすべきを以て、本文庫は書架一段の光彩たるべき也。

人類と禽獸　尾崎行雄著　再版　定價拾五錢　郵送料貳錢

明治四十五年史　大日本國民中學會編　定價壹圓五十錢　郵送料拾貳錢

學生立身要鑑　大日本國民中學會編　再版　定價壹圓廿錢　郵送料拾貳錢

小學校卒業生　立身訓　大日本國民中學會編　第六版　定價參拾五錢　郵送料四錢

中學百科寶典　大日本國民中學會編　第七版　定價八拾錢　郵送料八錢

改訂最新　國民讀本　前編　大日本國民中學會編　第七版　定價貳拾五錢　郵送料六錢

改訂最新　國民讀本　後編　大日本國民中學會編　第四版　定價貳拾五錢　郵送料六錢

五十日速成　簿記獨習書　相馬商學士　津田卯一郎著　新刊　定價壹圓　郵送料拾貳錢

百日速成　作文獨習書　大日本國民中學會編　十四版　定價壹圓　郵送料拾貳錢

算術問題解法　荒井常一著　十一版　定價八拾錢　郵送料八錢

東京國民書院發行

340
41

女子作文全書　大日本實修女學會　編　定價六拾五錢　郵送料八錢

俳句作法　佐藤紅綠著　十一版　定價參拾錢　郵送料四錢

青年歷史文庫第一編　櫃原宮　大日本國民中學會　編　定價參拾五錢　郵送料四錢

青年歷史文庫第二編　三韓征伐　大日本國民中學會　編　定價參拾五錢　郵送料四錢

生ひ立ちの記　青年時代　トルストイ作　德田秋江譯　定價九拾錢　郵送料八錢

母の戀　ドオーデ作　上村左川譯　再版　定價八拾錢　郵送料四錢

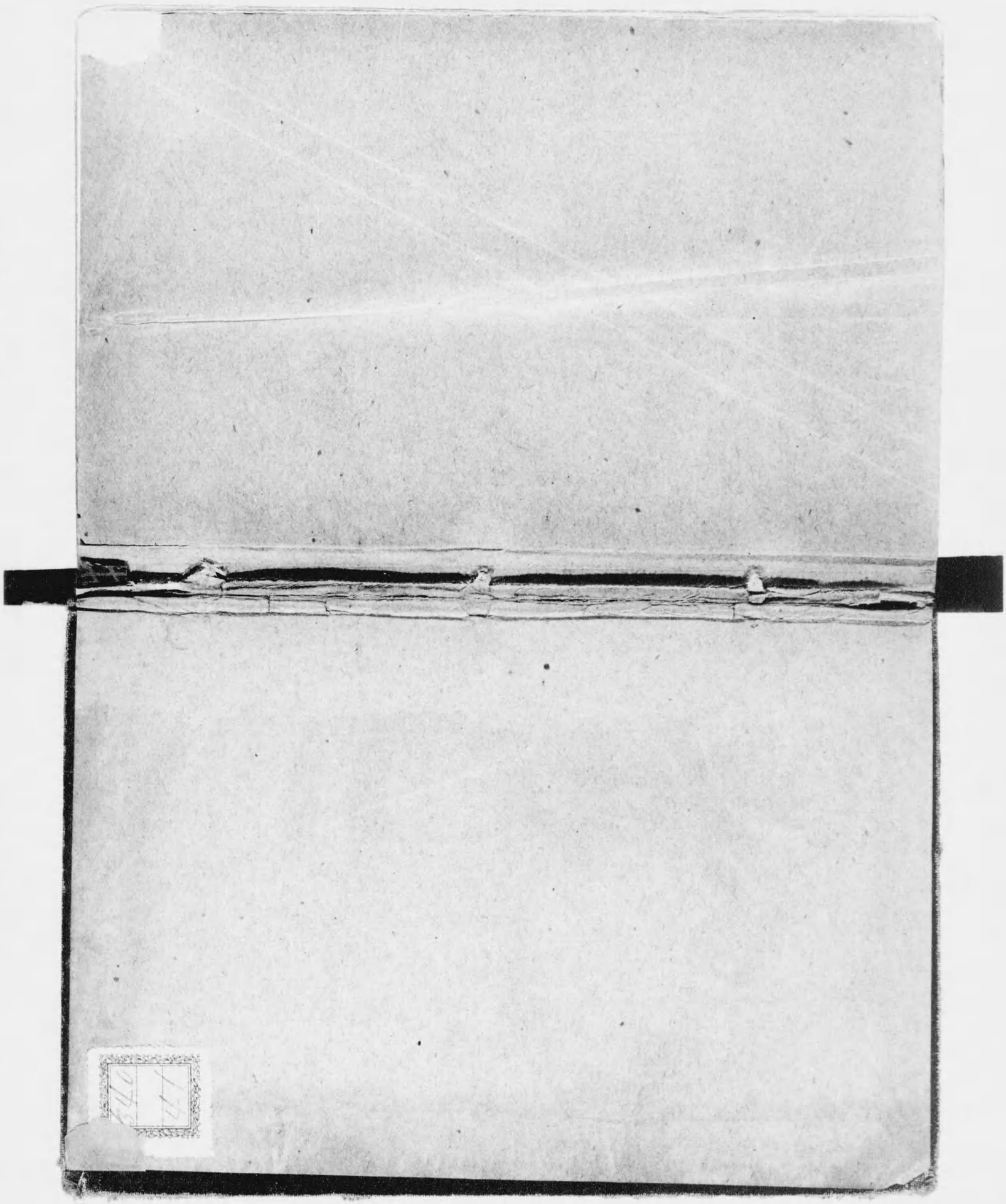
小說　赤い玉　佐藤紅綠著　第三版　定價參拾八錢　郵送料四錢

秋蠶教師　久保田松吉著　定價壹圓廿錢　郵送料拾貳錢

入學受驗準備書　大日本國民中學會　編　定價參拾錢　郵送料四錢

東京國民書院發行

16



終